

まちかど・ズーム IN!

みなさんからの素敵な情報を待ってます!

もちの花が咲いたよ

北保育園で「だんごさし」



ミズキの木に団子を刺す小正月の伝統行事「だんごさし」が1月11日、北保育園で行われ、60名の園児が父母や地域の人たちと楽しみました。

初めに、「ヨイショ、ヨイショ」の威勢の良い掛け声を上げながら、木のうすを使ったもちつきに挑戦。つき上がったもちをピンクや青に色づけ、小さく切って丸め、宝船や米俵など縁起の良い飾り物とともにミズキの枝先に刺しました。

若手商業者グループ「恵比寿屋」が企画した「サンタGOGO市」が12月22日、市内中町・長町などの商店街で開かれ、約6,000人の買い物客でにぎわいました。

参加した52店舗は、目玉商品を販売するワゴンセールなどを行い、また、歩道には30人以上のサンタが繰り出し、子供たちにお菓子などのプレゼントを配って回りました。

いろいろな種目で交流

スポーツ少年団交流大会



伝統の“技”を披露

弥治郎こけし初びき



白石和紙初すき

こけしの初びきが1月2日、弥治郎地区のこけし神社で行われました。実演を披露したのは弥治郎系の伝統こけし工人で、福島県塩川町在住の井上はるみさん。みこ姿でろくろ台に向かった井上さんは慎重に木を削り、赤や青、黄色のろくろ模様を施すなどして、神社に奉納する8寸のこけしを仕上げました。

また、市内で唯一、和紙すきの伝統を受け継ぐ鷹巣の「白石和紙工房」で1月5日、初すきが行われ、遠藤まし子さんがすき舟を巧みにあやつりながら一枚一枚、心を込めて和紙をすきました。この日すかれた和紙は、奈良東大寺のお水取り行事で修行僧がまとう紙衣(かみこ)に使われます。



南中体育館改築工事安全祈願祭

南中学校体育館改築工事の安全祈願祭が12月10日、川井市長や工事関係者が出席して行われました。

第二グラウンドに建てられる新体育館の建築面積は1,533㎡で、今年8月に完成の予定です。

設計には、ワークショップに参加した生徒やPTA、地域住民などの意見が生かされ、高齢者や身障者にやさしいバリアフリーを加味し、地域住民に開放されるクラブハウスや、生徒の部室などを併設しています。



商店街ににぎわいを

サンタGOGO市

12月16日、白石市スポーツ少年団に所属している少年野球やサッカーなどのチームがホワイトキューブに集まり、綱引きやむかで競争、玉入れなどの種目で競い合いました。

参加した13団体約250名の子供たちは、普段の大会とは違い幾分リラックス。どの競技にも家族などからの声援を受けながら、さわやかな汗を流しました。

地域住民にも親しみやすい体育館



市民の施設として役立てて

かんぼの宿と災害協定を締結

12月12日、白石市と白石簡易保険加入者ホーム(かんぼの宿白石)との間で、地震発生などの際に、施設を住民の避難場所として提供する災害協定が締結されました。

協定の内容は、大広間など屋内外施設の避難場所の提供、炊き出しなどによる非常食の提供、浴場を開放し温泉入浴を提供するなど、かんぼの宿白石がすべて無料で提供するというものです。

市役所を訪れた遠田総支配人は、「市民の施設として役立つように努力したい」と話されました。

子室に恵まれますように

道祖神のお宮を建て替え



江戸末期から大平坂谷の斎ノ入地区に祭られている「道祖神」のお宮を、昨年10月に近くに住む高橋泰雄さんが建て替えました。

高橋さんは、当時このお宮を建てたといわれる方の子孫に当たり、「長い年月、風雨にさらされてお宮が崩れかけてきたので、地域の方の協力を得て建て替えた。毎年11月にはお祭りを開きたい」と話していました。

私の祖父、川井貞吉は一八八四年(明治十七年)に生まれ、一九六七年(昭和四十二年)に死亡した。故朝倉松雄先生は『誇り高き明治の人々』の中で、「異国樺太で独り越冬した時、後にも先にも一度だけ泣いたという。川井貞吉青年、十七歳の晴れ姿である。それから二十年、切った張った男度胸の旅からず、感ずるところあって、裸一貫故郷白石に帰り・・・」と書いておられるが、私も一度だけその涙を見たことがある。



川井市長のせせらぎトーク

祖父の涙

この年、前半、柿の売れ行きが不振で、出荷業者は大損害を被り、そのダメージのため廃業する人が続出した。私も損失の大きさに肝を冷やして、「じいさん、もうやめろよ。」と何度も言ったが、「どうせ無一文からの出発だ。すっからかんで、もどもどだ」と言い、最後まで粘った。後半になって、俄然市況が好転する。ほとんどの業者が出荷をやめたために、品薄状態が続き、柿が暴騰したのである。ついに前半の損は取り返し、相当な利益を得た。そのような生涯を生きた男の涙である。私の家には何人かの従業員がいたが、そ

の中で一番かわいがられたのは、田中次郎(仮名)さんだった。田中さんは後に、福島県の郡山に移って、福島交通に勤めた。オーナーであるO氏に目をかけられ、常務取締役まで登りつめ、その後自立の道を歩いた。祖父は時々訪ねて来ては羽振りの良さを見せる次郎さんに、「こう言っていた。『次郎や、おめえ、仕事を伸ばしていくのはいいが、Oさんつうのは、ながながの人道。』」不幸にもその予感当たった。次郎さんの仕事が順調であるのを見定めたO氏は、乗っ取りにかかったのである。ある晩、次郎さんが真っ青になって我が家に転がり込んできた。「おずんつあん、なんとが助けでける。このままではOに乗っ取られ、無一文になっちゃう。」しかし祖父は黙って横座に座ったまま、目を閉じつきりだった。嘆願を重ねた次郎さんがあきらめて戻った後、ポツンとつぶやいた。「次郎もかわいそうな奴だ。助け

てやりでえにも相手がOでは、俺の身上(財産)全部渡しても、太刀打ちできねえがらな。」その後急速に祖父に衰えが見えるようになった。昭和四十二年の十二月、医師から「もうこの年は乗り切れないでしょう。」と言われ、駆け付けた人の中に、次郎さんがいた。彼は病人の腕をとって「おずんつあん、もつと元気で生きてでける。」と言いながら号泣した。その時祖父が閉じていた目をあけ、口を開いた。もうすっかり呆けていたはずなのに、正気になったのであるうか、「次郎や、すまねがったな。ただ俺にはどうしてやる力もねがったんだ。勘弁してける。」その目じりから、一筋の涙が滴り落ちるのを、私は確かに見た。昭和四十二年十二月十三日が命日である。次郎さんが亡くなるまで、毎年この日、祖父の墓に、花束と田中次郎の名刺が置かれていた。(二〇〇一年十二月十三日記す)